ごみ処理総量 13年連続減少

26年度 資源物は古紙回収要因にアップ

富士市はこのほど、平成26年度の市ごみ処理状況の速報値をまとめた。市が処理したごみ総量は8万824ト。25年度に比べ2608ト（3・1％）減少し、13年連続の減少傾向を示した。減少率は過去5年で最大となっている。市民1人1日当たりの焼却量は688グラで25年度比25グラ減と大きく減少したが、市ごみ処理基本計画「フジスマートプラン21」に掲げた目標値640グラは達成できなかった。

ごみ処理総量の内訳は、焼却量が6万9071ト（25年度比2480ト減）、資源物量は9969ト（同327ト増）、埋め立て・その他が1784ト（同455ト減）あった。

焼却量のうち、最も減少率の高かったのが事業系。25年度に比べ8・8％（1858ト）の減少率を達成した。家庭系は1・6％（720ト）の減少、下水・し尿汚泥は2・3％（98ト）の増加。

資源物量は、26年4月にスタートした協働型古紙回収事業により大幅な増加となった。

内訳を見ると、▽びん類1728ト（25年度比24ト減）▽かん・金属1413ト（109ト減）▽古紙類2694ト（393ト増）▽せん定枝946ト（76ト増）▽ペットボトル471ト（35ト減）▽衣類・小物類465ト（22ト増）▽その他（電池・コード類・蛍光管）71ト（4ト減）▽小型家電308ト（4ト増）▽容器プラ1850ト（1ト増）▽廃食用油22ト（2ト増）―。

古紙類の増加は平成19年度以降初めて。24年度からまちづくりセンターなどの公共施設で拠点回収を展開している衣類・小物類は年々増加している。

容器プラは21年度の分別回収開始から年々減少してきたが、初めて増加に転じた。廃食用油については、「小学校が拠点回収先として定着してきた」（市廃棄物対策課）として増加傾向にある。

びん類、かん・金属、ペットボトルは減少傾向が続いている。

ごみ処理総量に対する資源化率を見ると12・3％。近年は減少傾向にあったが、25年度を0・7ポイント上回った。

市民1人1日当たりのごみ排出量は25年度比22グラ減の812グラ。フジスマートプランに掲げた目標値860グラを48グラ下回った。

同プランは26年度が最終年度。市では本年度、プランの理念を基本的に引き継いだ「市ごみ処理基本計画2015―2024」を策定。ごみ処理を取り巻く環境の変化に柔軟に対応しながらごみ減量を進める方針を示している。

新計画では中間年度の31年までに、家庭系ごみ1人1日当たりの排出量（資源物を除く）470グラ、資源化率18・0％、家庭系と事業系を加えた1人1日当たりの焼却量640グラ、事業系ごみ量年間1万6800トの目標値を掲げている。

2015/5/15 富士ニュース